

高原町教育研究所

I	研究主題	9-1
II	主題設定の理由	9-1
III	研究の目標	9-1
IV	研究仮説	9-2
V	研究構想	9-2
VI	研究組織	9-2
VII	研究内容	9-3
1	ふるさと学習の基本的な考え方とめざす児童生徒の姿	9-3
(1)	ふるさと学習の基本的な考え方	
(2)	ふるさと学習でめざす児童生徒の姿	
2	アンケートの実施と分析	9-4
(1)	「設問別集計」の分析の結果	
(2)	「クロス集計」の分析の結果	
3	基本的な学習段階（モデル）とコア素材	9-6
(1)	学年の発達段階に応じたステージ	
(2)	コア素材の基本的な考え方	
(3)	その他の素材	
(4)	内容の取り扱い	
(5)	ふるさと学習のモデル案	
4	ふるさと学習の実践	9-8
(1)	授業のねらい	
(2)	指導計画	
(3)	本時の学習指導過程	
(4)	授業の実際	
ア	児童の作品	
イ	TV会議の様子	
ウ	授業後の発展的な学習活動	
エ	授業を終えて	
VIII	成果と課題	9-10
○	参考文献	
○	研究同	

I 研究主題

ふるさとを愛する「たかはるの子」の育成
～高原ならではの地域素材を生かした小中連携の取組～

II 主題設定の理由

情報化、グローバル化等により時代が急変し、我が国は世界でも稀にみるスピードで少子高齢化、核家族化が進み、地域社会における人間関係が希薄なものとなっている。

このような社会情勢の中で、宮崎の教育創造プランにおいては、「恵まれた自然、先賢の精神、豊かな人情などの本県教育資源を生かしながら、『確かな力を基盤とした感動と感性の教育』を推進することとおして、『ふるさとを愛し、自分に自信と誇りを持ち、夢や希望を抱いて、社会に貢献する気概を持つ子ども』の育成を目指す」としており、創造の視点1に「ふるさと教育の充実」を挙げている。

そして、「第2期 明日の宮崎を担う子どもたちを育む戦略プロジェクト」においては、地域ぐるみの教育環境推進を基盤とし、戦略2に「地域の特性を生かした多様な一貫教育の推進」を設定しており、県内各地で種々の先進的な実践がなされている。

本町は、平成18年10月にNPO法人「日本で最も美しい村」連合に加盟し、美しい農山村の景観や環境・文化を保存する取組を行っている。間近に見える霧島連山や裾野に広がる田園、その間を流れる清流は、まさに美しい日本の原風景である。このすばらしい地域の財産を生かし、児童生徒の郷土愛を高める教育を推進していくことは、今後一層社会の変革が進む中で、最も重視すべき課題であると考えます。

また、本町においても、小中一貫教育は積極的に推進すべき事項であり、高原中学校区及び後川内中学校区における様々な実践がなされ、これまでに合同研修会や合同授業研究会等も開催しながら、小・中学校が連携した取組を推し進めてきた。高原ならではの地域素材を生かしたふるさと教育を充実することで、これらの取組をより進展させることが期待できる。

このような状況の中で、児童生徒は、テレビやインターネット等を通じて世界中の様々な情報を容易に得ており、その情報量は非常に多く、また多種多様である。学校においては、各教科等で町内の自然や産業、特色、公共施設等についての学習をしており、地域に応じた学習課題を設定し、地域素材を活用したり情報を収集したりしながら、ふるさとについて学んできている。

一方、実態調査によると、95%以上の児童生徒が「高原町のことを『とても好き』、『好き』」と回答しているにもかかわらず、「町鳥、町花、町木、町旗等を知らない」、「町の人口や主な産業を知らない」、「高原町のことをもっと知りたい、調べたいと思わない」、「高原町の自慢できることを誰かに教えたいと思わない」など、意外に知らないことが多く、身近なふるさとについての興味・関心が高いとは言えない実態も見られた。

そこで、本町では、町内児童生徒に義務教育の7年間（小3～中3）でぜひとも学習させたい地域素材を精選し、高原ならではの地域素材を活用したふるさと学習指導モデルを作成し、小・中学校の連携を図りながら系統的に郷土の自然や歴史、産業、伝統文化を学習できるようにしたいと考えた。このような取組を行えば、児童生徒の身近なふるさとへの興味・関心がさらに高まり、「ふるさとを愛する『たかはるの子』の育成」ができると考え、本主題を設定した。

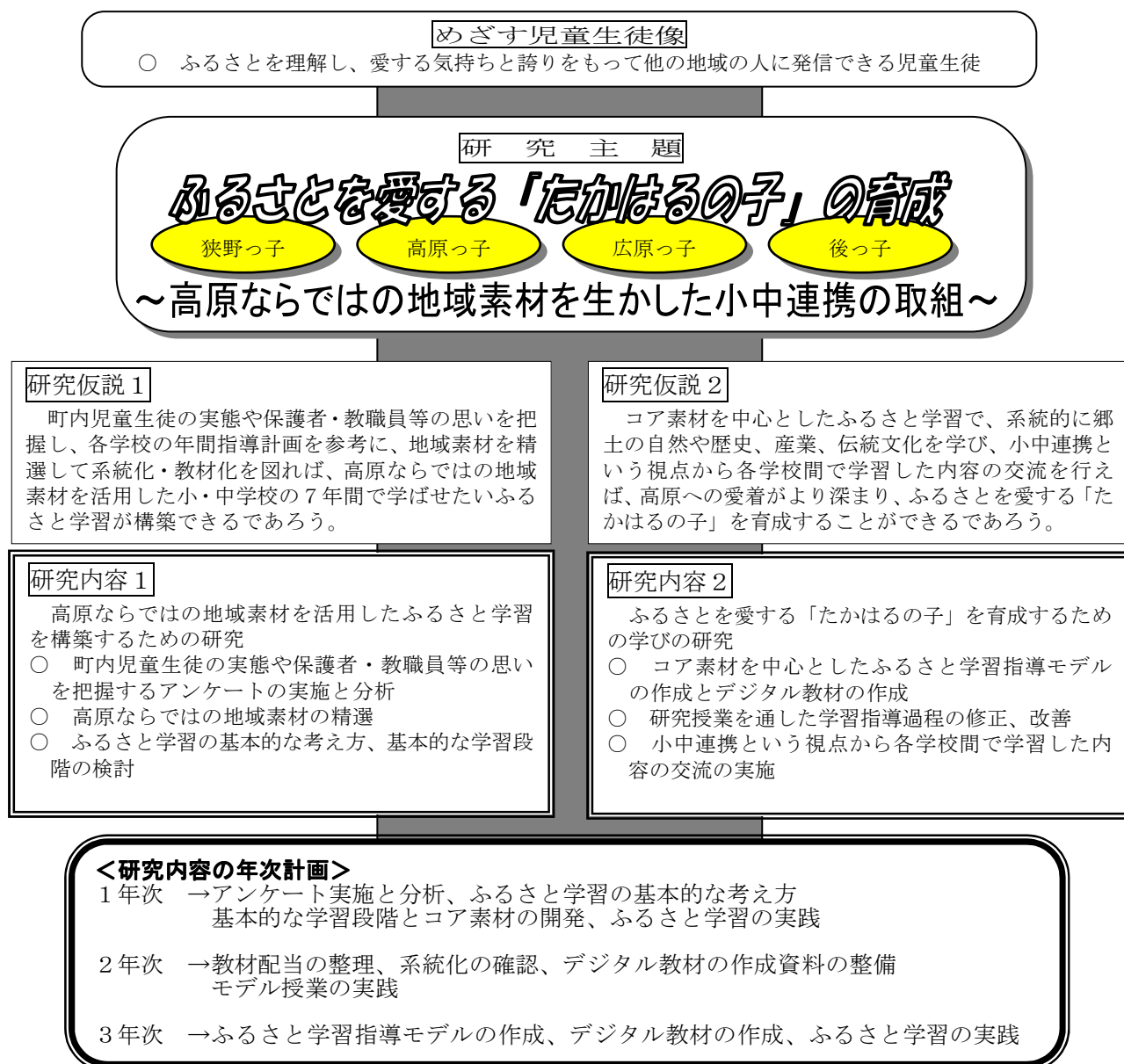
III 研究の目標

- 1 小・中学校の7年間（小3～中3）で学ばせたい、高原ならではの地域素材を活用したふるさと学習指導モデルを作成する。
- 2 小・中学校の連携を図り、コア素材で系統的に郷土の自然や歴史、産業、伝統文化を学ぶことを通して、ふるさとを愛する「たかはるの子」を育成する。

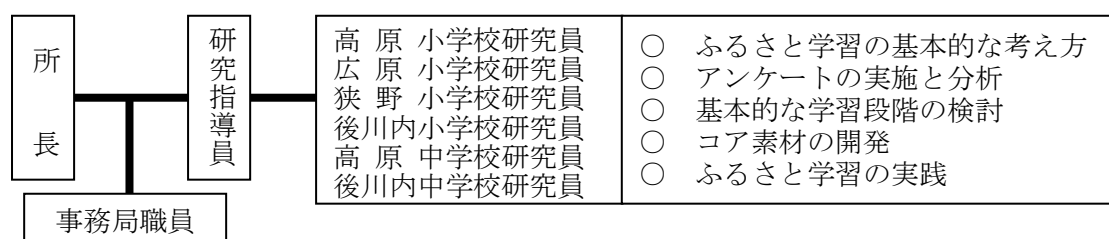
IV 研究仮説

- 1 町内児童生徒の実態や保護者・教職員等の思いを把握し、各学校の年間指導計画を参考に、地域素材を精選して系統化・教材化を図れば、高原ならではの地域素材を活用した小・中学校の7年間（小3～中3）で学ばせたいふるさと学習が構築できるであろう。
- 2 コア素材を中心としたふるさと学習で、系統的に郷土の自然や歴史、産業、伝統文化を学び、小中連携という視点から各学校間で学習した内容の交流を行えば、高原への愛着がより深まり、ふるさとを愛する「たかはるの子」を育成することができるであろう。

V 研究構想



VI 研究組織



Ⅶ 研究内容

1 ふるさと学習の基本的な考え方とめざす児童生徒の姿

(1) ふるさと学習の基本的な考え方

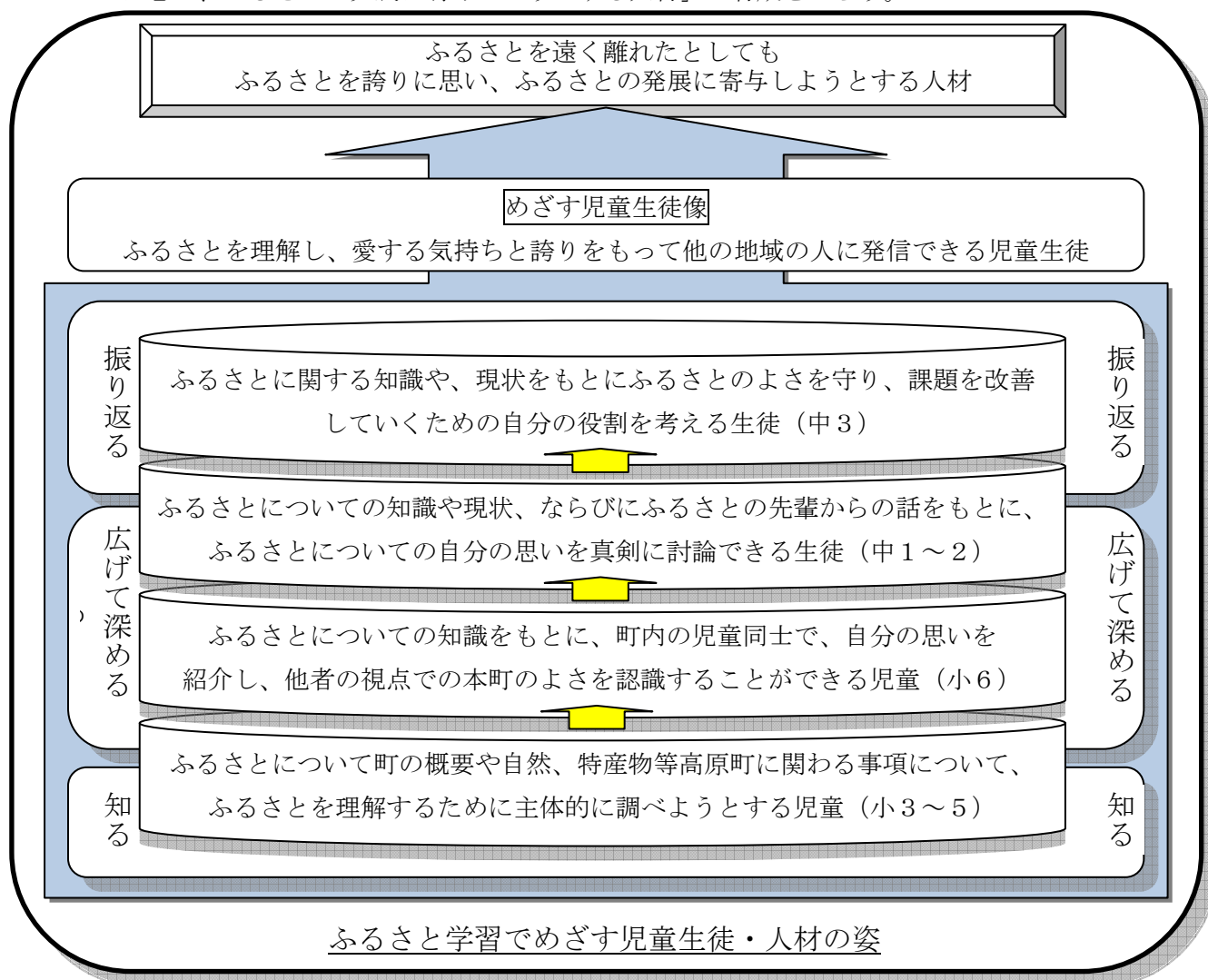
本町の町勢、史跡、施設、自然等基本的な知識を理解し、町内の児童生徒同士、先輩との交流を通して、本町のよさを見つめ直すことで、高原町に誇りを持ち、夢や生き甲斐をもって主体的に生きていく力を育て、町の発展に寄与する人材を育成することをねらう。

ふるさと学習では、町内の児童生徒が、ふるさとに関する正しい知識をもつことも大きなねらいのひとつであるが、知識を得て、それを増やすこと自体が目的ではなく、得た知識で本町のよさを知り、郷土愛を高めることにつなげることが大きな目的である。また、知識を得ることだけでなく、先人や町内に住む先輩方との関わりを通して、いろいろな人のふるさとに対する思いについても考えさせることで、情的な側面も大事にする。

また、ふるさと学習は、総合的な学習の時間を中心とし、各教科・道徳の中にも、高原ならではの地域素材を配置し、小学校3学年から中学校3学年までの7年間で、大きな3つのステージと発達段階に応じた基本的な考え方を踏まえ、総合的な計画のもとに実施する。

(2) ふるさと学習でめざす児童生徒の姿

ふるさと学習を通して、下記のように段階的にめざす児童生徒の姿を設定し、各段階に応じた児童生徒の育成を図り、最終的には「ふるさとを遠く離れたとしても ふるさとを誇りに思い、ふるさとの発展に寄与しようとする人材」の育成をねらう。



2 アンケートの実施と分析

本研究の方向性を明らかにするため、下記の要領でアンケートを実施した。

調査目的	高原町に関する「知識」・「心情」・「愛着」・「思いや願い」について、実態把握と分析を行う。
調査時期	平成22年9月上旬
対象者	町内の児童（小学3～6年生）251名、生徒（中学1～3年生）297名、 長子の保護者392名、小・中学校の教職員59名、地域の方々（区長や民生委員等）48名
調査方法	対象者別に質問紙を配付し、後日回収する。

(1) 「設問別集計」の分析の結果

問1の「高原町が好きですか」では、児童生徒及び保護者ともに、「とても好き」、「好き」という肯定的回答が約9割であった。その理由として、「自然の素晴らしさ」や「人々の優しさ」などが多く上げられていた。また、否定的回答の理由としては、「店が少ない」、「交通が不便」など生活環境に関する意見が多くをしめた。

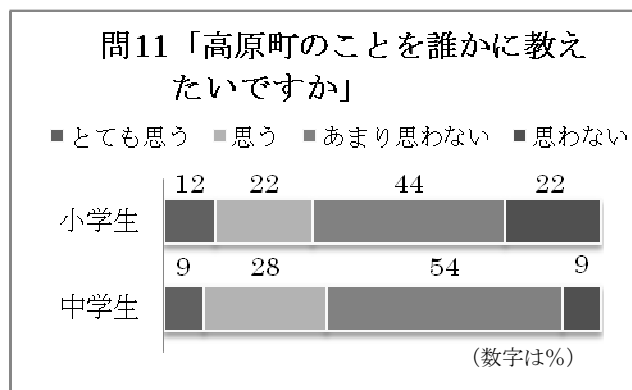
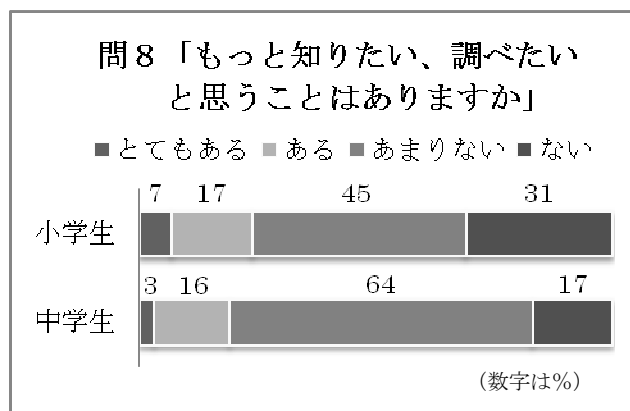
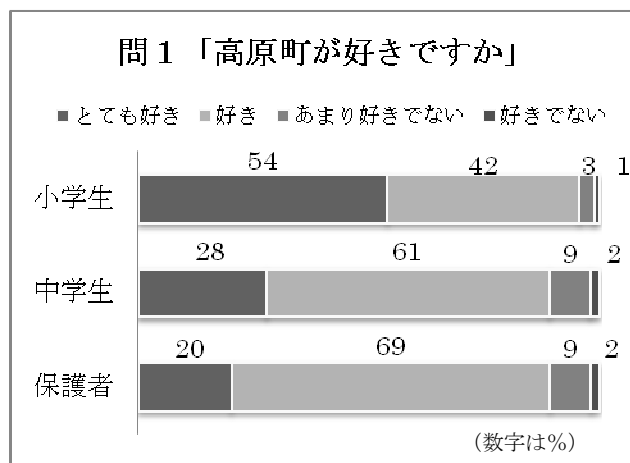
問8の「高原町のことで『もっと知りたい、調べたい』と思うことはありますか」では、肯定的回答は4分の1以下であった。「高原町が好き」と答える児童生徒はとて多いのだが、「町のことをもっと知りたい、調べたい」とあまり思われていない」ところには、何らかの原因があると考えられる。

問11の「高原町のことを誰かに教えたいたいですか」では、小学生も中学生も否定的回答が多かった。その理由として、地域素材を取り扱った授業が少なかったり、高原町に関する知識が児童生徒に十分定着していなかったりしていることが考えられる。

教職員のアンケートからは、「高原町の素材を使ったふるさとに関する学習は必要だと思うか」の問いでは肯定的回答が9割近くあり、ほとんどの教職員が必要だと考えている。しかし、「高原町の素材を自ら教材化して授業に取り入れたことがあるか」の問いでは、肯定的回答は約1割であった。

教職員からは、「自分自身が、高原町についてよく知らないことがある」、「すぐ使える教材がない」という声も聞かれ、高原に関する地域素材の整備が求められている。

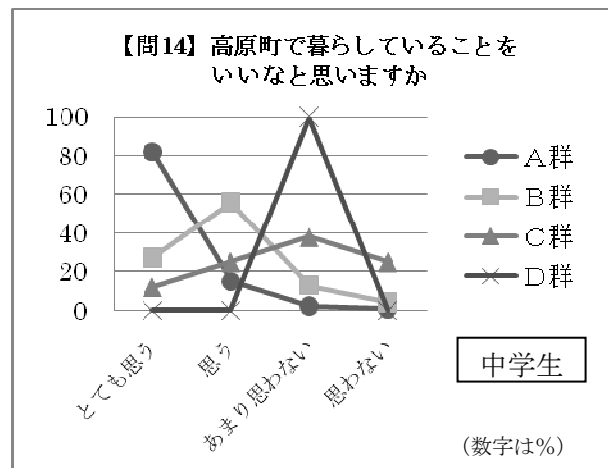
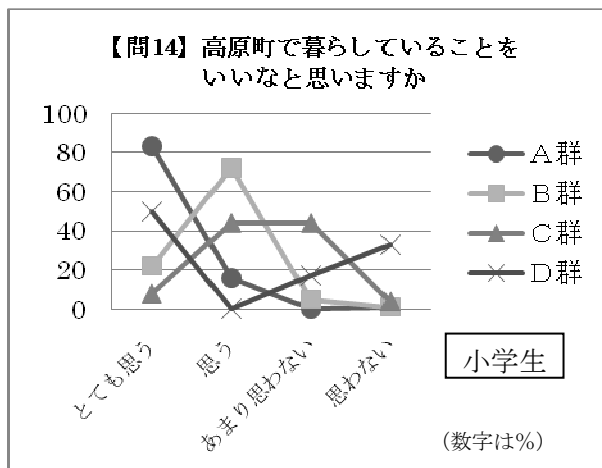
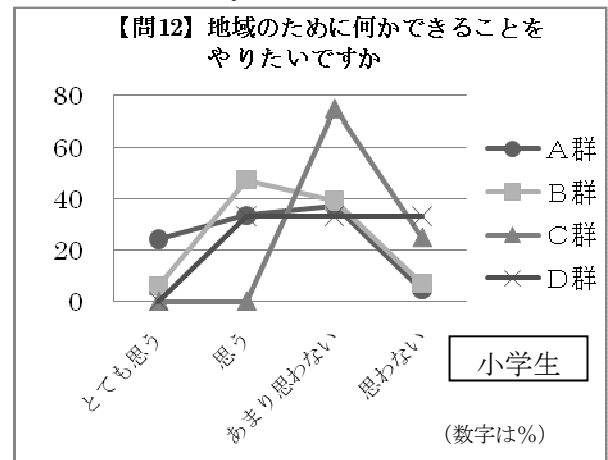
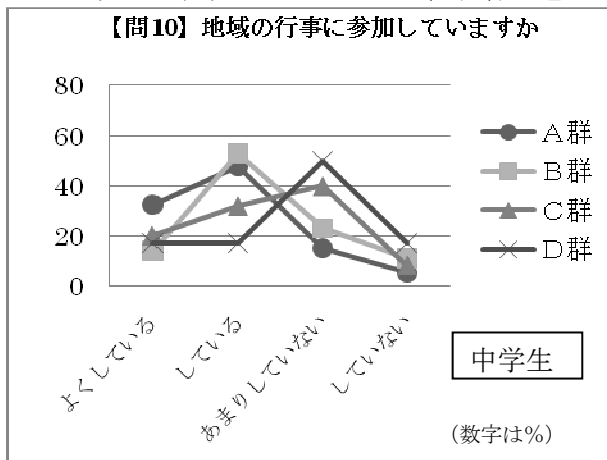
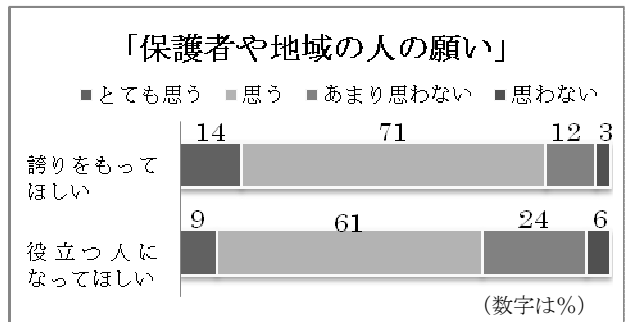
保護者や地域の方々のアンケートからは、「高原町に対して誇りをもってほしい」、「高原町の



ために役立つ人になってほしい」と願う人々が7割～8割いた。高原町を児童生徒に託す期待が大きいことが分かる。

(2) 「クロス集計」の分析の結果

町に対する愛着の度合いで、行動や意識にどのような違いが見られるかを把握するため、問1の「あなたは高原町が好きですか」で、「とても好き」、「好き」、「あまり好きでない」、「好きでない」と答えた児童生徒をそれぞれ、A群、B群、C群、D群という4つの群に分け、それぞれの群でどのような傾向が見られるか、クロス集計をして分析した。以下のグラフは、小学生や中学生のデータから、顕著な違いが見られたものである。



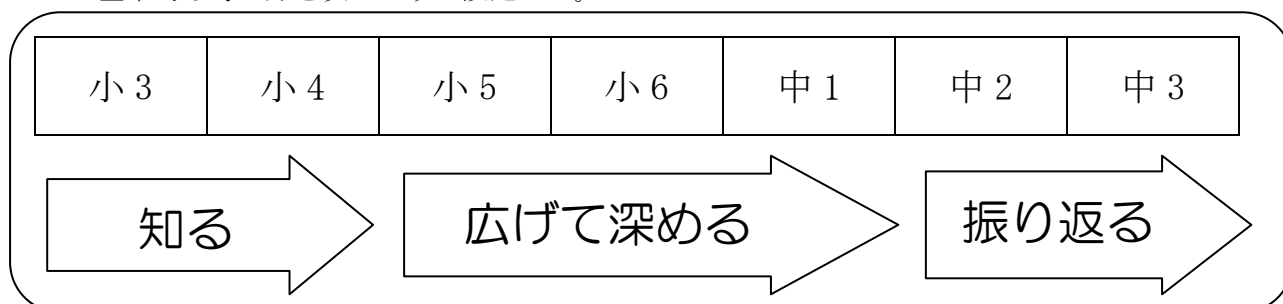
問10「地域の行事に参加していますか」(中学生)では、A・B群の方が、C・D群に比べて肯定的回答が多かった。問12「地域のために何かできることをやりたいですか」(小学生)では、C・D群の否定的回答が目立った。問14「高原町で暮らしていることをいいなと思いますか」では、小学生も中学生も同じような傾向が見られ、A・B群は肯定的意見が多く、C・D群は否定的意見が多いなど、高原町で暮らすことへの満足度に大きな差が見られた。

これらのことから、「高原町を好き」と答える児童生徒ほど、町への関心は高く、町のために行動したいという意欲が大きく、最終的に高原町で暮らしていてよかったという回答につながるということが分かる。そのため、この「ふるさと学習」を進めていくことは郷土愛を高めていく上で大切だと考えられる。

3 基本的な学習段階（モデル）とコア素材

(1) 学年の発達段階に応じたステージ

小・中学校を通して、ふるさと学習を実施するために、小学校3学年から中学校3学年までの基本的な考え方を次のように設定した。



上記の考え方をもとに、それぞれの学年に応じ、以下のように、段階的にふるさとについて関わる学習を設定する。

「知る」段階	小学校3・4年生段階において、3学年の社会科で本町について学習することを中心に、ふるさとに関わる知識を増やすことを目的とする。町章、町木、町花、町鳥や町の様子など、ふるさと高原の具体的な事実を学習する段階。霧島山についても概要を学び、基本的な知識を得る。高原音頭なども簡単に取り扱う。
「広げて深める」段階	「知る」段階での知識をもとに、歴史や事実の背景等、本町についてのよさをさらに掘り下げる段階。霧島山については、「知る」段階で得た知識等をもとに、交流学习等を通して、他の児童生徒の多様な考えや思いにふれさせる。道徳においても町に関わる素材をもとに内面的に考えさせることも行う。 小学校段階のまとめとして、「高原町のよさ」についてテレビ会議システムを活用して発信し、他の学校との交流を通して、ふるさとのよさを多面的に考えさせる。
「振り返る」段階	「広げて深める」段階で考えた「高原町のよさ」を再度、改善点も含めて検証し、ディベートを通して、現状と自らの思いを深く考えさせる。 また、この段階は「人とのふれあい」を一つのテーマとし、「ふるさと学習」をもとに考えた自分の思いを町内の先輩と話をすることで、多様な考えにふれさせ、振り返らせる。 「ふるさと学習」7年間のまとめとして、Web ページにおいて、学習の成果を発信する。

(2) コア素材の基本的な考え方

「ふるさと」学習では、地域の素材を学習の対象とすることは当然のことであるが、これまでの本町の地域素材は、高原町のもの、地理、歴史、施設等を扱う一方、特に総合的な学習においては、各小学校区それぞれの地域素材に重点を置き、学習を進めてきていた。

もちろん、それ自体は、身近な素材を自分なりの方法で調べ、まとめ、発信するという観点から非常に大事なことであると考ええる。しかし、本研究主題にある「たかはるの子」という視点から考えた時、町内の小・中学生が、高原町で生まれ育った児童生徒として、共通に語れる素材を学ぶことで、一体感や連帯感が深められ、郷土に対する愛情もより深まるのではないかと考えた。

そこで、小・中学校を通して、高原のシンボルである高千穂峰を中心とした霧島山に焦点をあて、中心（コア）に学ぶ素材とし、「たかはるの子」を育成しようと考えた。

(3) その他の素材

上記のコア素材を囲むように、ふるさと高原に関わる学習として、各教科・道徳等において社会科の地域学習や、高原音頭、町民歌等を配置することとした。

(4) 内容の取り扱い

「ふるさと学習」として各教科や総合的な学習の時間、道徳においては、次のような内容を取り扱う。

教科等	内 容	
	小学校	中学校
各教科	○ 社会科→町の概要、地図、歴史 ○ 理科→地層の観察 ○ 音楽科→高原町民歌 ○ 図画工作科→霧島山等町内の自然・史跡を題材としたスケッチ ○ 家庭科→郷土料理 ○ 体育科→高原音頭	○ 社会科→高原の地図、歴史 ○ 理科→地層、狭野杉 ○ 音楽科→高原町民歌 ○ 家庭科→郷土料理 ○ 英語科→高原町の紹介
総合的な学習の時間	○ 教科で扱わない町についての調べ学習 ○ 町を主題とした内容に関わる作品を表現する時間 ○ テレビ会議での情報発信に関わる時間	○ 中学生の視点で、高原のよさを調べる時間 ○ 町の先輩とふるさとについて語り合う時間 ○ Web ページ作成等情報発信に係る時間
道 徳	○ ふるさとの偉人や自然に対する教材を開発し、郷土愛や自然に対する畏敬の念について考えさせる時間	

(5) ふるさと学習のモデル案

○ コア素材に「霧島山」を据えた基本構想（計画の整備・学習の実施後、改善を行う）

学年	段 階	基本的な考え方	総合的な学習の時間	道徳	教 科	その他	備考
小 3	知る	○ 高原町について知る。	高原町を調べよう 霧島山を知ろう	道徳（地域教材）	社会科 町内についての知識 山や神社の名前	高原音頭 町民憲章	
小 4		○ 高原町についての知識を増やす。	霧島の山々を調べよう 高原クイズを作ろう		図画工作科 霧島山を絵に描こう	町民歌	
小 5	広げて 深める	○ 高原のシンボル 霧島山について調べる。	霧島山のよさや恵みを調べよう		社会科 高原町の産業を適宜 取り上げる		
小 6		○ 高原のよさを広げる。 （交流学习） ・ 1 回目の発信	見つめ直そうふるさとの山「霧島山」	霧島を守る人々	社会科 高原の歴史 理科 火山の噴火や地震によって変化することに関わる内容 家庭科 郷土料理		テレビ会議の活用
中 1		○ 中学生としての視点で高原のよさを見つめる。	霧島山を守っていこう		社会科 高原の地図、歴史 理科 地層、狭野杉		
中 2	振り 返る	○ ふるさとについての思いを討論する。	ふるさとの先輩と語ろう	道徳（地域素材）	家庭科 郷土料理		ディベート
中 3		○ これまでの知識、振り返りから得た中学3年生としての高原町のよさを発信する。	ふるさと高原を発信しよう		英語科 高原町の紹介		Web で発信

※ 道徳については、次年度教材開発を行う。

4 ふるさと学習の実践

(1) 授業のねらい

「ふるさとを愛する児童生徒を育む」という視点を明確に意図し、児童にとって身近な「霧島山」をコア素材として用いれば、「高原町に関するアンケート」の間8「高原町のことで、『もっと知りたい、もっと調べたい』と思うことはありますか」、間11「高原町の自慢できることを誰かに教えたいと思いますか」についての意識が高まるのではないかと考え、総合的な学習の時間において、ふるさと学習の実践を行った。

(2) 指導計画

学年	第6学年	視点	ふるさと学習
単元名	見つめなおそう、ふるさとの山「霧島山」	時数	5時間
ねらい	○ 「霧島山」のよさ・美しさについて調べ、そのすばらしさを他の学校や町内外の人々に伝えることができる。		
段階	児童の活動・内容	教師の指導・活動の留意点	評価
第1時	○ ふるさとの山「霧島山」について知ろう。	○ アンケートの結果によってふるさとについての認識をふり返らせ、ふるさとの山「霧島山」について調べようとする意欲を高める。	○ 「霧島山」のよさ・美しさについて、調べようとする意欲をもてたか。
第4時 (本時)	○ TV会議を通して詩や短歌・俳句の発表会を行い、「霧島山」のよさ・美しさについて話し合おう。	○ TV会議がスムーズに行えるように、接続やマイク等の点検を入念に行う。 ○ それぞれの学校の作品に対して意見交換ができるよう、時間を十分に確保する。	○ 他の学校の人に自分の作った作品を通して「霧島山」のよさ・美しさを紹介できたか。 ○ 友だちの作品を通して「霧島山」のよさ・美しさについて考えを深められたか。
第5時	○ 単元の活動を振り返り、学習のまとめをしよう。	○ 深まった考えをもとに、ワークシートで自己評価ができるようにする。	○ 「霧島山」のよさ・美しさについて考えを深め、そのすばらしさを他の学校や町内外の人々に伝えることができたか。

(3) 本時の学習指導過程

活動目標…TV会議システムを用いて発表会を開き、それぞれの作品のよさを話し合うことを通して「霧島山」についての理解を深める。

児童の活動・内容	教師の指導・活動の留意点	資料・準備
1 本時の活動を確認する。 TV会議で発表会を開き、作品のよさを評価し合って「霧島山」への理解を深めよう。	● TV会議システムを使うため、映像と音声が若干ずれることを伝える。 ● 本時の活動内容と目的をワークシートの本時の流れで確認し、めあて意識をもたせる。	TV会議システム (ビデオ、マイク、プロジェクタ、スクリーン) ワークシート
2 あいさつ及び簡単な自己紹介を行う。		
3 活動の進め方について話を聞く。 ・ 発表の仕方 ・ 聞き方やメモの取り方 ・ 発表に対する意見や感想の述べ方	● 発表の際は、作品が相手によく見えるようにし、声をゆっくりはっきり出すように伝える。また、相手の作品のよさに目を向け、必要に応じてメモを取るよう指示する。	
4 学校ごとに発表を行い、それぞれの作品に対して意見や感想を述べ合う。	● メモをもとに、作品のどのような点がよかったかを具体的に伝える発表になるようアドバイスする。	自分の作品 ワークシート
5 発表会を通じた交流で感じたことや考えたことをまとめる。 ・ 一人で ・ 学級のみなど	● 一人一人の意見をもとに、相手の学校の作品全体を「ひとつの言葉」にまとめて表現できるように話し合わせ、まとめた言葉をそれぞれに伝え合わせる。	ワークシート
7 教師の話を聞き、次時の内容を確認する。	● 次時は、単元全体の振り返りと評価をしてまとめをすることを伝える。	

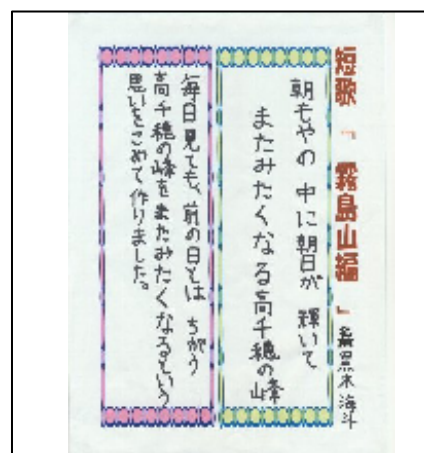
(4) 授業の実際

ア 児童の作品

「霧島山」のよさ・美しさを高原町や霧島ジオパーク等の資料・Web ページで調べたことをもとに自分なりの考えをまとめさせ、その思いを詩や短歌・俳句に表現させた。また、作品を作るだけでなく、他校の児童に説明するために「作品の解説」も書くようにした。

<右の作品の解説>

毎日見ても、前の日とはちがう高千穂の峰を、また見たくなるという思いをこめて作りました。



【児童の作った短歌】

イ TV会議の様子

学校ごとに作品と解説を画面に向かって全員が読み上げるようにし、一方の学校が発表し終わったら、他方の学校がそれに対して意見や感想を述べるように展開した。児童は、相手校の発表する様子を凝視し、時折ワークシートにメモを取りながら真剣に相手の発表に聞き入っていた。

<ワークシートのメモ>

私は、〇〇さんの「いつも見たいなふるさとの山」という表現が心に残りました。宮崎県にこんないい山があつてよかったと思いました。その他に、みんな心をこめて読んでいて、素晴らしい表現の仕方をしていてすごいと思いました。



【作品を発表する児童】

また、授業の終わりには、相手の学校の発表を聞いたことをもとに学級で話し合いをして、ひとつの言葉にまとめて交換し合った。それぞれの作品の表現のよさや相手の学校の友だちの考え方などにふれ、お互いによい意味での刺激を受けることができ、全ての児童がとてもよい交流ができたという感想をもつことができた。



【作品のまとめの発表を聞きあう児童】

<広原小児童が狹野小児童に向けてまとめた言葉>

「毎日見ている霧島を身近に感じ、美しい景色を誇りに思っている狹野小の6年生！」

ウ 授業後の発展的な学習活動

本単元の学習で再発見した「霧島山」のよさ・美しさを、全校児童や地域の方々に伝えたいという児童の願いをもとに、発展的な学習活動として、学年集会での発表や学校便りでの作品紹介をした。



【学年集会での発表】

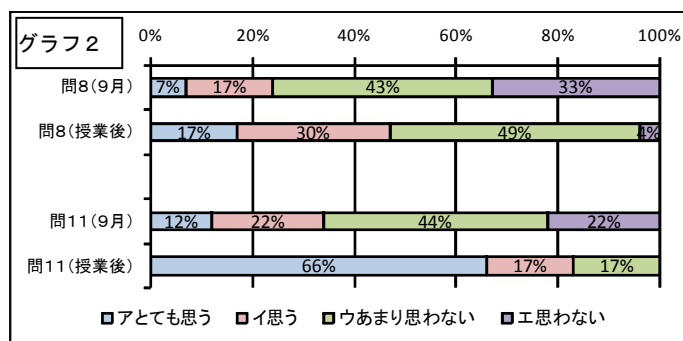
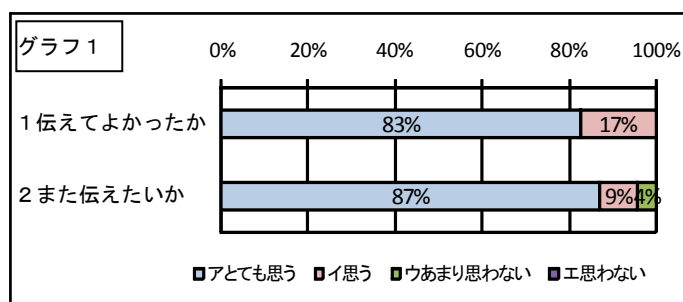


【学校便りでの短歌紹介】

エ 授業を終えて

本時の自己評価では、グラフ 1 に示すように、「発表会でよさ・美しさを伝えてよかったと『とても思う』、『思う』、「また他の学校の人などに霧島山のよさ・美しさを伝えたいと『とても思う』、『思う』と、ほとんどの児童が回答した。

また、単元終末の「高原町に関するアンケート」再調査では、グラフ 2 に示すように、問 8 「高原町のことで、『もっと知りたい、もっと調べたい』と思うことはありますか。」については肯定的回答が 23 ポイント高くなった。問 11 「高原町の自慢できることを誰かに教えたいと思いますか。」については 49 ポイントも高くなり、「ふるさとを愛する児童生徒を育む」という視点を明確に意図し、「霧島山」を素材として学習したことによる成果が得られた。



VIII 成果と課題

(1) 成果

- 高原町におけるふるさと学習の在り方について、基本的な考え方やそれに基づいた段階的な学習、基本構想などを構築することができた。
- 町内の小・中学生、保護者、地域の方々から幅広く、意見を聞き、それをもとにふるさとに対する意識を把握することができ、ふるさと学習の方向性を明らかにすることができた。
- 交流学习を通して
 - ・ 共通した素材をもとにした交流学习を行うことで、共有感・連帯感を味わいながら異なる視点で、ふるさとのよさを見つけることができた。
 - ・ 身近なふるさとのよさを意図的に扱うことで、そのよさを再発見できることがわかった。
 - ・ ふるさとのよさを再認識した児童は、それを伝えようとする意識が高まり、関連する他の素材や教科に対する意欲も高まることがわかった。

(2) 課題

- 初年度の研究を生かして、コア素材を中心とした教材の開発や配当など、総合的なふるさと学習の展開をさらにすすめる必要がある。
- ふるさと学習のねらいに合った内容を活用しやすいように、資料や教材を整備・開発し、それらを有機的に関連させる必要がある。
- ふるさと学習の基本構想に基づいて、小・中学校間でどのように小中連携ができるか、さらに、モデル案・学習内容の改善が必要である。

【参考文献】

「新学習指導要領ガイドブック～『生きる力』をはぐくむ教育課程の創造を目指して～」宮崎県教育委員会
「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間」文部科学省

【研究同人】

所 属	職 名	氏 名	所 属	職 名	氏 名
教育委員会	所 長	江田 正和	高 原 小 学 校	教 諭	郷 田 渚
教育総務課	研究指導員	濱砂 敬三	広 原 小 学 校	教 諭	矢 野 学
教育総務課	課 長	山崎 和行	狭 野 小 学 校	教 諭	雪 丸 正子
教育総務課	課 長 補 佐	田上 則昭	後川内小学校	教 頭	高 田 靖史
教育総務課	係 長	久保田光信	高 原 中 学 校	教 諭	川 崎 彩
			後川内中学校	教 諭	新 田 尚子

